様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：３４３１２
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３９８８

研究課題名（和文）社会科授業が苦手な小学校教師の資質・能力育成プログラム開発：授業観形成に着目して

研究課題名（英文）Development of a program for fostering the qualities and abilities of elementary school teachers who are not good at teaching social studies: Focusing on the formation of a view of teaching

研究代表者
大西　慎也（ONISHI, Shinya）

京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・准教授

研究者番号：２０７５５３１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：社会科授業観を獲得するためには、同僚をはじめモデルとなる先輩教師、管理職、大学教員などの指導者の存在が重要である。つまり、支援を得ながら、自分自身の意志で社会科授業にコミットしているということになる。新たな授業観は、誰かに教えられて獲得できるものなのではなく、自ら「試行錯誤しながら社会科授業を実践する」「社会科教育について研究する」ことによって獲得できるものである。これは、研究対象者がセルフスタディを行っていたと考えることができる。そして、同僚をはじめモデルとなる先輩教師、管理職、大学教員などがクリティカルフレンドである。今後、セルフスタディを広めていくことが課題となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
社会科授業においては、授業観の形成が重要になる。インタビュー調査を進める中で、対象者が自分自身で新たな授業観を獲得していく過程が明らかとなってきた。さらに、そこにはクリティカルフレンドにあたる支援者の存在があった。これは、セルフスタディと呼ばれる研究法である。つまり、教員の資質・能力向上に、セルフスタディという新たな研究方法が有効であることが明らかとなってきた。このことが、本研究の教師教育学における学術的意義であり、社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：In order to acquire a view of social studies teaching, it is important to have mentors such as colleagues, model senior teachers, administrators, and university faculty members. In other words, they are committing themselves to social studies classes of their own volition while receiving support. A new view of teaching is not something that can be acquired by being taught by someone else, but rather by “practicing social studies classes through trial and error” and “conducting research on social studies education” on one's own. This can be thought of as self-study by the research subjects. And colleagues and other model senior teachers, administrators, and university faculty members are critical friends. The challenge will be to spread the use of self-study in the future.

研究分野：社会科教育学、教師教育学

キーワード：社会科授業観　セルフスタディ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

教師は「高度専門職業人」として位置づけられており（中教審、2015）、教師の仕事ほど複雑で知性的で芸術的で高度の創造性と専門性を求められる仕事はないと言われている（佐藤、2015)。久冨（2008）は，教員は、「医者」「法律家」「研究者」とは異なり、その専門職性が明確にはなっていないとしており，他の専門職にはない困難さを抱えていると述べている。社会科を専門とする教師は、カリキュラムデザイン力を有しており、それを規定するものとして「教師をとりまく環境・文化」「教師の教科観・教育観」「個人の職務経験や専門性」がある（草原ら、2014；五十嵐、2011；岡島、2018）。社会科を専門とする教師は、カリキュラムデザイン力や教科観などに基づき、社会事象を探究する学習を進めていることが先行研究から明らかになっている。このように社会科を専門とする教師は、社会科教育を実践する土台となる「高度専門職業人」としての資質・能力が備わっていると考えられる。

しかし、これまで現職の小学校教師にインタビューを行ったところ、社会科を苦手と考えている教師は社会科を暗記教科と認識しており、知識注入型の授業を未だに行っている。その原因は、小学校教師の社会科教科観が被教育体験に依存していることである。社会科を苦手と考えている小学校教師は、自身が児童・生徒期経験した暗記主義の社会科授業をモデルに授業実践を行っているのである。つまり、社会科を苦手と考えている小学校教師は、社会科授業を実践するための土台になる「社会科授業観」を十分に有していないと考えられる。すべての小学校教師が社会科を専門とする教師のような社会科授業を実践するために、被教育体験による社会科教科観を脱却し、資質・能力の育成を図ることは現在の重要な課題であるといえる。

２．研究の目的

本研究では、社会科授業実践を苦手だと考えている小学校教師とともにアクションリサーチの手法で研究を進め、社会科授業実践に関わる資質・能力を育成するための研修プログラムを開発する。

そのために本研究の目的は次の 2 点とした。

①社会科授業の実践に困難さを感じている小学校教師が、学力向上に資する社会科授業を実践するための資質・能力形成する過程に着目し、そのプロセスと促進条件を解明する。

②社会科授業実践に関わる資質・能力育成に有効な研修プログラムを開発する。

本研究では、これまで着目されてきた社会科を専門とする社会科授業実践に関わる資質・能力をすでに形成している小学校教師ではなく、社会科を苦手と考えており社会科授業実践に関わる資質・能力を十分に形成していないと考えられる小学校教師を対象にしている。本研究の特徴は次のとおりである。

①社会科を苦手と考えており社会科授業実践に関わる十分な資質・能力を形成していない小学校教師と協働で、アクションリサーチの手法を用いて研究を進める。

②社会科授業実践に関わる資質・能力を育成するためのモデルを、複数の社会科を苦手と考えており社会科授業実践に関わる十分な資質・能力を形成していない小学校教師に提供し、アクションリサーチの手法で、協働で研究を進める。

③社会科授業実践に関わる資質・能力の構造とその特質が明確になる。

④未だ社会科を暗記教科だと認識している小学校教師に、学力向上に資する社会科授業実践につながる研修プログラムを提供できるようになる。

本研究は、これら 4 点の特徴をもっており、社会科を苦手と考えており社会科授業実践に関わる十分な資質・能力を形成していない小学校教師が、社会科授業実践に関わる資質・能力を形成することに資する汎用性の高い研究になると考えている。

３．研究の方法

本研究では、質的研究法を取り入れ、インタビュー調査を行った。

分析対象者は，小学校教師 10 名である。対象者は，目的的サンプリングによって選択した。目的的サンプリングでは，研究の目的を直接反映し，情報量が豊かに得られるように選択基準を設定する(メリアム、2004)。本研究では，典型的サンプリング(メリアム、2004)により，社会科授業を実践している，またはしていた小学校教師を対象とした。インタビュー調査したのは 16 名である。そのうち，本研究の目的である，社会科授業観の変容についての語りが確認できた 10 名を分析対象者とした。

質的研究における分析方法は，多種多様である。サトウ(2019)は，質的研究の研究対象を「経験」とし，質的研究法を「構造」「過程」のいずれを扱うのか，「実存性」「理念性」のいずれを重視するのかを基準に分類している。サトウ(2019)によれば，質的研究法は，「過程×実存性」「構造×実存性」「構造×理念性」「過程×理念性」のいずれかに位置付けることができる。本研究では、小学校教師の社会科授業観の変容プロセス（過程）を明らかにすることが目的であり，そのために小学校教師の実際の姿（実存性）を対象としていることから「過程×実存性」に位置付けられている複線経路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach：以下 TEA）に

よる分析を行うこととした。

４．研究成果

（１）調査の概要

調査対象者は，小学校教師 10 名である。対象者の概要を表 1 に示す。

表１　対象者の概要

対象者	性別	世代	教職歴	インタビュー時間
T1	男	30 代	12 年 10 月	143 分
T2	女	30 代	12 年 4 月	61 分
T3	男	30 代	11 年 7 月	56 分
T4	男	30 代	13 年 3 月	60 分
T5	女	40 代	17 年 3 月	101 分
T6	男	40 代	20 年 4 月	90 分
T7	男	30 代	10 年 3 月	50 分
T8	男	40 代	20 年 3 月	52 分
T9	男	40 代	17 年 7 月	56 分
T10	男	40 代	20 年 3 月	69 分

分析データは，対象者への面接による半構造化インタビューによって収集した。対象者には，インタビュー開始時に，研究の目的，インタビューを録音すること，インタビューの内容を個人が特定されない形にして学会で発表したり，論文として公開したりする可能性があることについて説明し，同意を得た。インタビューの際は，質問項目を記したインタビュー・ガイドを参照しながら質問した。内容は IC レコーダーで録音し，逐語録を作成した。インタビュー時間は一人あたり約 74 分（合計 738 分）であった。データは，265,780 字（255 ページ：40 字×36 行）であった。

（２）分析の方法

本研究では、TEA による分析を行うこととした。TEA とは，個人の人生経路を可視化する研究法や人間の様態をオープンシステムに基づき記述するための分析ツールであり（福田、2015）、TEM（Trajectory Equifinality Model：複線経路等至性モデル）・HSI（Historically Structured Inviting：歴史的構造化ご招待）・TLMG（Three Layers Model of Genesis：発生の三層モデル）の三つの方法からなる文化心理学の新しい方法論の体系を提唱するものである(サトウ、2015)。サトウ(2015)によれば，等至点（Equifinality Point：以下 EFP）とは TEM の根幹をなす概念である。個人（対象者）が多様な経路を歩みながらも「等しく」「至る」点ということになる。まずは，研究の目的に応じて EFP を設定することになる。本研究における EFP は「新たな社会科授業観の獲得」とした。EFP に至った人を研究対象者として抽出し，分析していくという手続きが，HSI である。ご招待と表現するのは，研究者がインタビュー対象者をサンプリングするといった驕った態度ではなく，時間をいただいて話を伺うという意味が込められている(東原、2019)。HSI によるインタビュー後に，その内容を踏まえて TEM 図を作成する。TEM 図作成にあたっては，分析のために様々な概念を用いる。今回の TEM 図作成にあたって使用した概念は，「等至点（EFP）」「両極化した等至点（Polarized-EFP：以下 P-EFP）」「分岐点（Bifurcation Point：以下 BFP）」「必須通過点（Obligatory Passage Point：以下 OPP）」「社会的助勢（Social Guidance：以下 SG）」「社会的方向付け（Social Direction：以下 SD）」である(東原、2019)。また本研究におけるそれぞれの概念の意味は次ページ表 2 のとおりである。

表２　TEM 図の概念と本研究における主な意味（東原、2019 に基づき作成）

概念	本研究における意味
等至点（EFP）	新たな社会科授業観の獲得
両極化した等至点（P-EFP）	社会科授業観を獲得できず授業改善にも取り組まない
分岐点（BFP）	社会科授業に対する考え方に変化が起こるきっかけとなった出来事
必須通過点（OPP）	等至点への経路において多くの小学校教師が経験する出来事
社会的助勢（SG）	等至点へと誘導する環境要因・文化的な力
社会的方向付け（SD）	両極化した等至点へと誘導する環境要因・文化的な力

（3）分析結果

逐語録を基にして，TEM 図を作成した。作成した TEM 図は，研究対象者にメールで送付したうえで，訂正，意見，感想を求めるやり取りをして完成させた。完成した 10 名の TEM 図を統合したのが図１である。

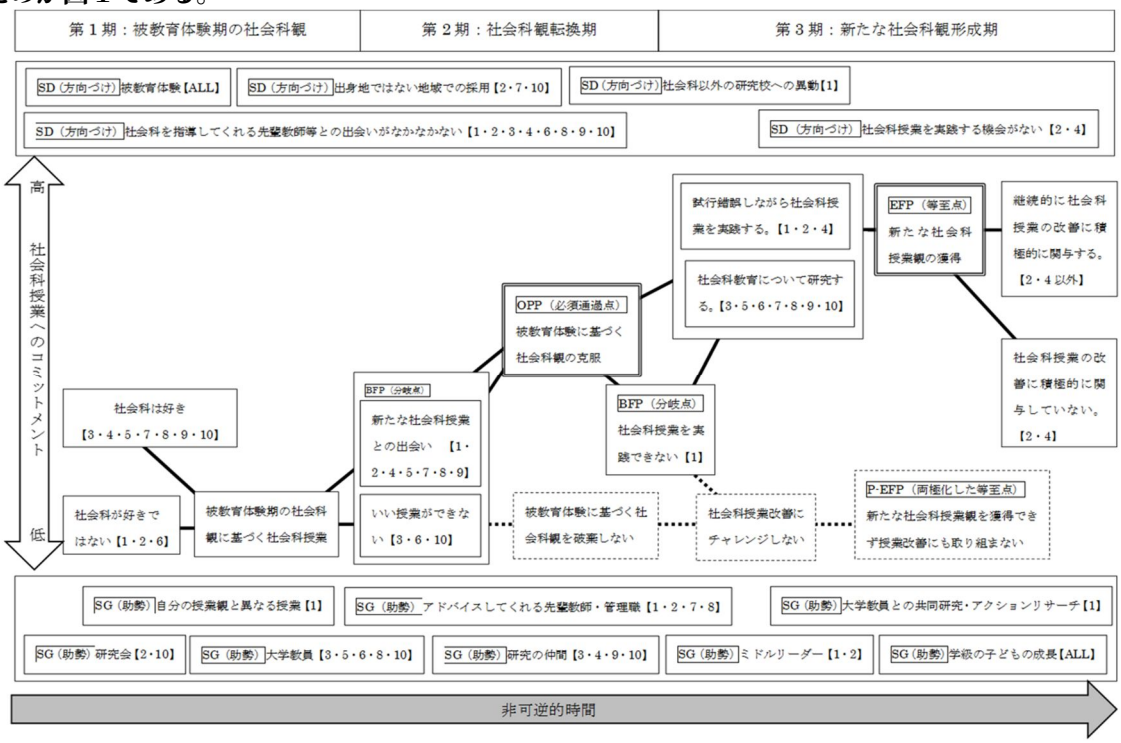

図１　10 人の小学校教諭の TEM 図：小学校教諭の社会科授業観獲得に至るプロセス

①第 1 期「被教育体験による社会科観期」

10 名のうち，T1・T2・T6 は被教育体験期に社会科が好きであったわけではない。特に T2 は，苦手であり嫌いであったと述べている。その他の対象者は，被教育体験期には社会科をどちらかといえば好きな教科と答えている。しかし，その後の共通点は，教員になった当初は，被教育体験に基づく授業を行っている点である。つまり，多くの小学校教師にとって，被教育体験の社会科観に基づく社会科授業を実践することは，いたって自然な流れであり，特に初任期においてはその確率が高いことが明らかになった。今回の調査対象者には，大学教員養成課程での学びを活かして授業実践している事例はなく，被教育体験の影響力の大きさを物語っている。

②第 2 期「社会科観転換期」

10 名とも OPP として「被教育体験に基づく社会科観の克服」を経験している。この OPP に至る過程において，それぞれの BFP を通過している。そのパターンは，次の 4 点である。

〇先輩教師との出会い
〇研究会での授業実践の機会
〇大学教員との出会い
〇社会科を研究している仲間との出会い

このパターンから今回の研究対象者の共通点として，OPP である「被教育体験に基づく社会科観の克服」に到達するためには，外部からの何らかの刺激が必要であることが分かる。それは，社会科授業を行う機会であり，人との出会いである。

③第 3 期「新たな社会科観形成期」

最終的に EFP に至る過程にも，様々な経路があることが分かる。

T1 は，校内研でそれまで取り組んだことのない社会科の授業に挑戦している。T2 は，研究会に向けて中学校の社会科教師のアドバイスを受けつつ，新たな社会科授業観を獲得している。T3 は，大学院に現職派遣で進学し，新たな社会科授業観を獲得している。同様に T5，T6，T7，T8，T9，T10 もそれぞれが大学院に進学することにより，自分なりの社会科授業観を獲得している。T4 は，社会科教育を研究する仲間に刺激を受け，現場で社会科の授業に挑戦し新たな社会科授業観を獲得している。このように 10 人の小学校教師はそれぞれの経路をたどり、EFP へと至っている。10 人の共通点は、OPP 到達後に自分自身が試行錯誤しながら社会科授業を実践したり、研究したりしていることである。つまり，社会科授業にコミットメントしているということができる。

（4）考察

本研究の対象者は，いずれも OPP に続いて EFP へと至るまでに「試行錯誤しながら社会科授業

を実践する」「社会科教育について研究する」を通過している。そして，社会科教育を実践するための資質を形成するためには，同僚をはじめモデルとなる先輩教師，管理職，大学教員などの指導者の存在が重要である。つまり，支援を得ながら，自分自身の意志で社会科授業にコミットメントしているということになる。新たな授業観は，誰かに教えられて獲得できるものなのではなく，自ら「試行錯誤しながら社会科授業を実践する」「社会科教育について研究する」ことによって獲得できるものである。

（５）明らかになった社会科授業改善に向けての方略

ここまで述べてきたことから、10 人の小学校教師はそれぞれの経路をたどり，「被教育体験に基づく社会科観の克服」に到達し、「新たな社会科観」を形成している。共通点は、研究対象者が自分自身の意志で社会科観を変容させていることである。これは、研究対象者がセルフスタディを行っていたと考えることができる。齋藤(2021)によれば、セルフスタディとは「自分とは何者かの研究であり、自分の行動の研究であり、自分の認識や思考についての研究である」。つまり、今回の 10 名の研究対象者は、自分自身の社会科観について、自身で探究し、自分自身がどのような授業を行っているのか試行錯誤しながら、自ら新たな社会科観を獲得したということである。大学の研究者が様々な理論を提案し、現場の教員に伝達したとしても、セルフスタディの様に、自らの行動、認識、思考についてリフレクションしながら学ぶ姿勢をもっていない限り、新たな自身の「観」を形成することは難しいのではないかと考えられる。そして、セルフスタディを実施する際に重要になるのがクリティカルフレンドである。齋藤(2021)によれば、クリティカルフレンドとは、セルフスタディを行う教師教育者に共感的に接しながら、多面的・多角的な視点を示しながら、時に批判的でありつつ、対話的かつ相互変容的に関わる重要な他者である。今回の研究対象者は、「被教育体験に基づく社会科観の克服」に至るまでに「先輩教師との出会い」「研究会での授業実践の機会」「大学教員との出会い」「社会科を研究している仲間との出会い」のいずれかを経験している。今回の研究担当者にとっては、先輩教師、研究会での批判的な意見を述べてくれる他者、大学教員、研究仲間がクリティカルフレンドになっているといえる。

今後このような、セルフスタディ研究が広まることが、教師の資質・能力の向上に欠かすことは出来ないのではないだろうか。それが本研究を進めてきての仮説である。しかし、現状はセルフスタディは、大学教員を中心に教師教育者自身による研究にとどまっているのが実際である。これを現場の教員が取り組めるような形にしていくことは今後の課題である。

【参考・引用文献】

五十嵐誓（2011）『社会科教師の職能発達に関する研究』学事出版
今津考次郎（2012）『教師が育つ条件』岩波新書
今津考次郎（2017）『新版変動社会の教師教育』名古屋大学出版会
大坂遊（2016）「教職課程入門期における社会科教員志望学生の社会科観・授業構成力の形成過程とその特質」全国社会科教育学会『社会科研究』85 号 pp.49-60
岡島春恵（2018）「中学校社会科教師の教科観の形成に関する事例研究－教科観形成の多層性と多面性に注目して－」全国社会科教育学会『社会科研究』88 号 pp.13-24
草原和博・大坂遊・瀬戸康輝・田口敏郎・中山茜・西村祥太郎・好井基文（2014）「社会科教師はどのようなカリキュラムデザインが可能か－歴史学習材の開発と活用の事例研究－」広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター『学校教育実践学研究』第 20 巻 pp.91-102
久冨善之（2008）「『改革』時代における教師の専門性とアイデンティティ」久冨善之編著『教師の専門性とアイデンティティ』勁草書房 pp.15-29
齋藤眞宏（2021）「教師教育におけるセルフスタディ：日本の学校教育におけるその意味の考察」『旭川大学経済学部紀要』79-80，pp.147-163
佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法』新曜社
サトウタツヤ（2015）「TEA というアプローチ」安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編『TEA 理論編 複線経路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社、2015 年、pp.4-28
サトウタツヤ（2019）「質的研究法を理解する枠組みの提案」サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編『質的研究法マッピング』新曜社、pp.2-8
佐藤学（2015）『専門家として教師を育てる』岩波書店
中央教育審議会(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」中教審第 184 号
東原和郎(2019)「教師がミドルリーダーへと変容する過程」秋田喜代美・藤江康彦編著『これからの質的研究法 15 の事例にみる学校教育実践研究』東京図書 pp.252-272
福田茉莉（2015）「まえがき－あなたともにある TEA とその未来」安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編『TEA 理論編 複線経路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社、pp.i-iv
S.B.メリアム：堀薫夫・久保真人・成島美弥訳（2004）『質的調査法入門』ミネルヴァ書房

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山内敏男・大西慎也	４．巻 創刊号
２．論文標題 教師教育者はいかに社会科教育を専門とする現職院生の学習に寄与するか－セルフスタディの手法を用いた教師教育実践の省察と改善－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 社会系教科教育学論叢	６．最初と最後の頁 pp.53-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 大西慎也
２．発表標題 日々の教育活動と研究活動により教師が獲得した社会科授業観
３．学会等名 日本教師教育学会 第32回研究大会（オンライン開催） 自由研究発表
４．発表年 2022年

１．発表者名 大西慎也
２．発表標題 小学校教師が有する社会科授業観の変容とその要因－社会科授業に対するコミットメントを視点として－
３．学会等名 日本教師教育学会 第31回研究大会（オンライン開催） 自由研究発表
４．発表年 2021年

１．発表者名 大西慎也
２．発表標題 小学校教師の社会科授業実践に関わる資質・能力の育成－社会科授業観変容過程に着目して－
３．学会等名 日本教師教育学会 第33回研究大会 自由研究発表
４．発表年 2023年

１．発表者名 山内敏男・大西慎也
２．発表標題 セルフスタディを語り合うー教師教育者の『教えることを教える』ことの探究とその成果ー
３．学会等名 中国四国教育学会第75回大会 ラウンドテーブル４
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 伊藤裕康、原宏史、大西慎也、伊藤貴啓、髙田準一郎、鈴木正行、服部太、月岡正明、橋本隆生、神野幸隆、酒井喜八郎、土井謙次、山城貴彦、大和田俊、村尾有里子	４．発行年 2022年
２．出版社 学術図書出版社	５．総ページ数 272
３．書名 社会科教育のリバイバルへの途ー社会への扉を拓く「地域」教材開発ー	

１．著者名 草原和博、齋藤眞宏、大坂遊、渡邉巧、西田めぐみ、岡田了祐、斉藤仁一朗、村井大介、山内敏男、大西慎也、内田千春、岡村美由規、祝迫直子、前元功太郎、山本佳代子、河原洸亮、宮本勇一、粟谷好子、石川照子、西村豊、深見智一、両角遼平、泉村靖治、櫻井良種、田中雅子ら	４．発行年 2024年
２．出版社 学文社	５．総ページ数 293
３．書名 セルフスタディを実践する－教師教育者による研究と専門性開発のために－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関